



夢への問い方についての心理学的な考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017955

夢への問い方についての心理学的な考察

川原 稔 久

1. 問題意識

フロイト、ユング、構造的なアプローチ

心理療法においてセラピストは、クライアントが見た夢をクライアントと話し合うことがある。そのことにはフロイト、S. (フロイト 2007/Freud 1900) やユング、C. G. (2016/Jung 1931) を始めとする心理療法の先達の多くが夢には意味があることを前提に夢を素材にした対話を心理療法の中心に据えてきたという背景もある。現代の精神分析療法においても、吾妻 (2018) によれば、夢を扱うことは想定されている。夢に意味を見出そうとする心性は、内面や無意識領域への着目であり、その傾向については、理論的および歴史的に、内省による内面化や近代自我の形成が関係する。

フロイトの『夢解釈』(フロイト 2007/Freud 1900) におけるフロイトの議論は、その歴史的な背景にイギリス経験論とブント (Wundt, W.) による構成的で要素的な考え方の当時の影響を受けて、意識を内省するという方法によって、心理的な印象や心理的な感覚などの素材を基本要素としてそれらの積み重ねや結びつきや連想という心理的な機能として、夢の心理的な内容・思考を解釈しようとしている、と捉えることができよう。また神経科医であったフロイトが当時の精神疾患を脳の病気と考える身体因論との関係のなかでヒステリーの治療論を打ち出した直後でもあった。それゆえに内外の感覚興奮や身体刺激と夢の源泉との関係を検討することがフロイトにとって必要となっていると思われるが、フロイトは神経症の自由連想による治療経験と対応させて夢についても自由連想を基本として、夢は心の産物であるという前提のもと、歪曲の考え方、抑圧の考え方、象徴化の考え方、夢は願望充足(欲望成就)であるという考え方を提出する。そして、最近の刺激や経験が顕在夢(顕在内容)を構成し、その背後で抑圧された幼児経験を潜在思想(潜在思考)として、その間に夢の作業として圧縮(縮合)、移動(遷移)を提案する。それゆえに、フロイトの考え方の場合、個人の心理的な経験が夢の源泉となっていると考えられる。

それに対してユング (2016/1931) は個人的な経験を越えた次元を夢についても無意識という考え方につ

いても射程に入れた、と対比して考えることができると思われる。フロイトとの対比でユングの考え方の特徴を要約すれば、個人の経験から生じた無意識に加えて個人を超えた自然としての無意識という考え方がユングには基本にあつて、それは人類の歴史の中で繰り返し継承されてきた思考や行動のパタン(元型)を形成し、それらは時代、民族、言語、文化を超えて共通して、伝承・神話・宗教・民話・昔話・夢において「比較的固定された象徴」として現れるとしている。そして夢は無意識の自然の表現であり、「夢で補償されているのはどのような意識的態度なのか」という補償の考え方と、「何のために夢を見たのか」という目的論的な見方を重視して、夢の素材のコンテキストを夢見手から詳細に語ってもらう方法を最初に重視している。臨床的な利用はそうした無意識の心の発達傾向の側面を垣間見ただけのことであり、夢への理解については最終的により長い経過の中で心の全体性を現実化して個性化していく過程を捉えることを射程に考えている。

これらの特徴については理論的に重要であるが、フロイトにおいてもユングにおいても心の領域や無意識的な内容を実体化しているという側面があるため、ここではそうした方向で夢の内容についてその意味論を論じるよりも前に、内容ではなくて形式的な側面や構造的な側面にまずは注目したい。というのも、現代の精神分析療法も転移という関係性の形式面への解釈介入が中心となっていて、分析心理学の夢へのアプローチでも夢への構造的なアプローチが最近の研究で注目されている (Konakawa, H. 2016, 粉川他2018, Tazuke, K. 2021) からであるし、また、のちの議論でも取り上げるが、まずは形式的な側面や構造的な側面を捉えることが次に内容の意味を吟味することにつながるというプロセスがあるからでもある。このことは、コンテキストを丁寧に捉えていくとコンテンツである意識の態度が判明するというユングが重視した方法とも重なると思われる。

粉川 (2020) はそれまでの研究を踏まえて構造的な視点を、三つの観点に集約させている。それらは、夢の私と他者との関係のあり方、夢の私の行為主体感の程度、夢の私の視点・場所・時間の連続性であり、田

附 (Tazuke, K. 2021) も基本的にその観点を踏襲している。これらの観点は状況というコンテキストのなかの自他関係における主体性を問う観点でもあったと考えられるので、ユングが指摘したように夢の中のコンテキストとそこでの夢見手の意識的な態度をどのように無意識が補償してくるのかという観点とも重なる可能性があるように思われる。そうした構造的な見方をより先鋭化しているのがGiegerich, W. (2021) ではないかと思われる。既に指摘したように (川原 2019, 2020) ギーゲリッヒは心 (魂) を思考の動きと捉え、考えるという動きそのものを魂と捉えていて、その考えるという動きに備わる視点とか視座そのものを重視している。そのことが構造的な見方に繋がると思われて、夢との作業 (Giegerich 2021) では、夢を思考の視覚化であると捉えている。つまり考えていることが目に見える形で体験されているのが夢であるとしている。したがって、夢では魂の考えるという動きを視覚的に体験するので、その視覚体験に現れる考えるという動きの構造的な特徴 (考え方に備わる視座や視点) に注目することになる。例えば、夢における移ろいやすさや平板さ、詳細な文脈が省かれる欠落性などが特徴として挙げられている。

なぜ夢なのか：夢からはインパクトを伴った深い気づきを得られる

ところで、心理療法においてセラピストとして筆者は心理相談に来たクライアントに夢を報告してもらい、その夢について話し合うことが実際多かった。なぜ夢を素材にして話し合うのかといえば、筆者の場合、夢を話し合うことでクライアントがそれまで気がついていなかった自分の在り方について改めて気がついたと言うことが多いという理由がある。またその際には、クライアントが大きな驚きや深い納得といった情動を伴って気がついていてという印象を筆者が持つことが多く、そのことで筆者にとっては、夢を話し合うことがクライアントにとって重要であるという考えを経験的に持つようになったという理由がある。つまり、クライアントばかりでなく筆者にとっても来談したクライアントについて夢を通して思わず発見したという経験が多くてインパクトがあったということである。そこでセラピストとしての筆者が夢に関心を持っていて、来談したクライアントに夢を尋ねることが多かったと言うことができるであろう。それでも実際に多くのクライアントが夢による対話が自分にとって大きな意味を持っていると語っている。つまり理論的な関心や理由というよりも経験による理由である。もち

ろん、来談したクライアントの全てについて夢を扱ったのかと言われればそうではないし、逆に夢を扱う場合ではない事例も多くあったし、むしろ初めは夢を話し合うことが多かったがやがて夢を話し合うことは無くなっていった事例も多く、夢を話し合うことが意味を持ち続けた事例はそれほど多くはない。そうしたことはなぜなのかという問いも重要であるが、それでも、いずれにしてもここでは、筆者がクライアントと夢について対話をして夢から自分についてさらに気がつくという現象に大いにインパクトを受けたということを前提として議論を始めたい。

どのように (how) という問い

そこで、なぜ夢を素材とした対話が自分についての気づきをもたらすのか、という問いが生じる。あるいは、夢による対話はどうのように気づきをもたらすのか、という問いが生じる。なぜ (why) という問い方とどのように (how) という問い方については、例えば、河合 (1967: 2-6) は心理療法の独自性を自然科学者との対比から考えていて、肉親が不慮の事故で死んだのはなぜかという問いに対して、心理療法家はクライアントともに向き合いクライアントの心が死の意味を受け入れ心が納得する作業に連れ添っていくことが仕事であり、自然科学者はどのように死んだのかを説明するのが仕事であると言う。さらに死について文学者は死のありようを徹底して表現するのが仕事であるし、哲学者は死ぬことの意味を考えるのが仕事であるとも言う。なぜという問いに対する答えとしての意味や意義は心の得心にとっては重要でそれだけにその問いと答えは果てしない一方で、他方ではどのようにという問いに対する答えとして仕組みや構造を明らかにすることで意味や意義に接近する方略も有効ではないかと考える。つまり、構造やコンテキストを問うことでコンテンツや意味が顕になるという方略である。

ここではまず、なぜ (why) という問いとどのように (how) という問いの違いについて区別した上で、どのように (how) という問い方について議論することも前提にしたい。なぜならどのように (how) という問いはより実際の、どのように (how) という問いには実質的な回答が考えられるが、なぜ (why) という問いには実質的な回答には辿り着けず、なぜ (why) という問いはその意味で実際的ではないからである。例えば、なぜ (why) という問いについては、なぜ夢なのか、なぜ対話なのか、なぜ気づきなのかといった問いのパリエーションが想定されるが、いずれにしてもその問いの答えは理由であるとか意味で

あるとか原因であるとか実体的な意義であるため、夢とは何かとか、対話とは何かとか、気づきとは何かといった、何らかの実態や本質を求める形而上的な問いや宗教的な問いになる可能性があると思われ、結果的に答えに至ることができない非現実的な問いで終わることが多いと思われる。他方で、実際的ではない問いを避けるという意味では、どのように（how）という問いが考えられる。どのように（how）という問いには、夢はどのような事態なのか、夢にはどのような特徴があるのかとか、どのような対話が夢についてされるのか、夢についての対話にはどのような特徴があるのか、夢の対話がどのようにして気づきをもたらすのか、それはどのような気づきなのか、その気づきとはどのような特徴をもつのかなどであろう。それらhowの問いに対する答えは、特徴とか特性といった状態や様態の性質であろうし、メカニズムといった力動的な過程やシステムなど構造的な状態が考えられるであろう。

例えば、大塚（2022）によれば、ユングにとっての問いは「変容がいかに起きるか」である。夢による対話が自分についての気づきによって変化や変容をもたらすのであれば、「変容がいかに起きるか」というユングの問いに対して、「変容は夢によって（も）起きる」との答えもありうるのである。そうであるならば、夢による対話が自分についての気づきをどのようにもたらすのかという問いは、夢による対話がどのように変容をもたらすのか、夢によって変容はいかに起きるかという問いであると同時に、変化変容が生じるのであればなぜこの夢を見たのかこの夢は夢見手にとってどのような意味を持つのかといった夢の意味を問う問いでもあることがわかる。いずれにしても夢による対話はクライアントにとって大きな意味を持つことになるので、夢による対話でどのように気づきが生まれるのかという問いは重要であり、まずは過程における力動や構造における様態を問うものであることをここでは確認しておきたい。そして、構造やコンテクストへの問いがコンテンツや意味への問いを導くように、どのように（how）という構造への問いがなぜ（why）という問いへの答えとして意味や意義を導くという過程があることになる。

夢への問いの多面性

しかしながら、夢による対話でどのように気づきが生まれるのかという問いにはいくつもの側面があって、夢への問いのあり方を整理して問うことが必要になってくると思われる。

例えば、夢を素材にした対話という言い回しにもいくつもの側面がある。まず通常は、夢についてのクライアントとセラピストとの間の対話という面が考えられる。さらに、夢についてのクライアントのなかの対話やセラピストのなかの対話という側面もある。つまり夢についての内的対話である。そうした対話では夢の素材についての対話を契機として、夢に限らずクライアントのあり方そのものについての対話にも自ずと発展しうる。そうすると、ここでの議論ではひとまず夢についての対話だけに限定して考えていくことが重要であることが分かる。なぜならば、議論の対象が内的対話一般ではここでの話題が拡がりすぎだからである。さらにここで注目している事象は、夢を見た人だけが単独で行う夢との内的対話という事象だけではなくて、夢を見た人が自分の夢について他者と対話することによって内的対話として気づきを得るという事象であることも分かる。つまり、夢をめぐる他者との対話が問いの対象に含まれていることが分かる。いや、むしろ自己内対話だけでは気づきに至ることができないことが多くて、他者との対話が契機となって気づきが生じるという現象が問いの対象と考えられる。つまり、気づきの過程に内的対話は伴うが、それ以上に重要であるのは他者が気づきの契機になっていることであると思われる。

また、夢との対話という言い方をしてみれば、対話の相手が夢ということも考えられる。つまりクライアントとセラピストが一緒になって、クライアントが観た夢と対話をするという面が考えられる。これまでの記述は、心理療法という特殊な場面におけるセラピストとクライアントの治療関係において夢を扱う状況で、夢がクライアントの気づきに意味があるという文脈であったが、ここで着想された夢を相手に対話をするという状況を考えて、治療関係を前提としたクライアントとセラピストという限定を外して、より一般に夢見手である語り手とその聴き手が夢という他者を相手に対話をするということを扱うことが分かる。

さらに気づきという点についても多様な側面がありうる。例えば、対話のあり方から気づきが生まれる側面があるとか、夢についての考え方によって気づきが生まれる側面があるとか、夢見手のあり方や夢見手と聴き手の関係が気づきに影響を与える側面があるとかなど、夢についての対話によって気づきが生じることにもいくつもの視点から考える必要があると思われる。

2. 課題と方法

夢における主体と対象

こうして夢による対話で気づきを得るという表現の含みうる意味が多面であることの例を挙げていくと、夢との対話およびそこから気づきを考える際にそのあり方が多面的であるのは、対話の主体が誰で対象が何なのかが揺らぐからであることが分かる。夢をめぐる、対話をする主体が誰なのかが揺らぐことと対象が何なのかにしても揺らぐことになるのではなからうか。そのことについてのヒントは、夢の体験とその夢を語る対話では、主体や対象の区別や境界が夢見手にとって曖昧に体験されることにあるのではなからうか。これに関して、ユング派の分析家である Giegerich, W. (2021:23) は、夢を見ることは見ることと見られることが同時であることを指摘していて、通常の経験のリアリティは主観と客観との対峙によって特徴づけられるが、夢のリアリティは主観と客観の対峙を主観が見ている構造で決定されるとしている。

そこで、夢という現象は通常の意識的な現象とは異なる側面を持っているという特徴を踏まえて、筆者はここでの課題を、夢についての問いや夢へアプローチすることへの問い、さらには夢から気づきを得る対話についての問いについて、これらの問いのあり方を整理することとした。

夢へアプローチした演習

その方法は実際的な方法としたい。具体的には筆者が学生とともに夢へのアプローチを実際に行っていたいくつかの演習で、夢へのアプローチについて学生が寄せたフィードバック（川原2022）から得られた視点を整理するという方法である。演習の受講生は心理学を専攻する学生であるので、夢の現象に興味を持つ側面はあるが、夢に関する先行研究の知識はまだあまりないため、却って夢の現象を素朴に受け取ってその特徴をフィードバックしてくれたという印象を筆者は得ていて、それを整理することを方法として考えた。

筆者が担当した演習は、学部心理演習と大学院の面接特論での演習である。臨床心理学を専攻する数名の学生及び大学院生を対象にロール・プレイを用いてカウンセリングの体験演習を例年行ってきた演習である。今年2022年度の演習で筆者は急に思い立ってカウンセリングのロール・プレイに加えて夢へのアプローチもやってみたい、やれるだろうと思い、試みた。初めのうちはやり方に慣れてもらうために、筆者の夢をいくつか取り上げて試しにやってみた。学生には夢へのアプローチについて、夢を聴いて気になることや

確かめたいことを夢見手に尋ねてみて、その対話で夢見手に何か新たな発見や気づきをもたらされれば、そのアプローチは成功であると説明した。1回80分ぐらいのセッションで一つの夢にアプローチする。まず、夢見手が自分の夢を書いてきた紙を配り、読み上げていく。参加メンバーが提示された夢について思いついた質問をしていく。そうやって夢の状況を正確に理解していく。60分ほどそうやって、夢見手には改めて気がついたことがあればそれを語ってもらう。最後に筆者がその夢についての理解をまとめて終わりとなる。その間の逐語録とそれを踏まえた感想及び考察をレポートとして提出してもらった。事後ではあるが、大学の授業アンケートに記載された受講生の感想からもこの方法がかなり成功したことがわかった。

夢へのグループ・アプローチ

筆者は、一つの夢について数人のグループでアプローチするという方法を、実際に幾つかのグループでメンバーとして経験してきたことがあったし、そうしたやり方の提唱者である Giegerich, W. のセミナーに参加したこともあった。また Giegerich, W. の夢に関するセミナーの著作（ギーゲリッヒ、W・河合俊雄 2013）も読んでいた。しかし二度ほど読んだこの著作で夢へのアプローチについてのコツは掴めていなかった。（また最近では Giegerich 自身の著作 Working with Dreams (Giegerich 2021) が出版されたばかりで、それを興味深く読み進めている最中でもあった。）それでも心理療法のいくつかの事例では長く継続的に夢を取り上げた対話が続いていたし、特に教育分析を目的とした面接では集中的継続的に夢に取り組む事例が多かった。そのなかで夢を取り扱うことに意味を確かに感じて興味深い経験をした事例もあったし、夢を扱いかねて次第に夢から離れていった事例もあったが、夢を取り上げればそれなりの気づきを共有できるという手応えのような感触を確かな感じで持つようになっていた。それで、心理学を専攻してそうした心の現象に関心を持ちやすい学生とは言え、グループで夢へのアプローチをしようと思ったり、そうできると思えたりしたことについては、なぜなのかが説明つかない。心理的な主訴を持たない、比較的健康な学生で単発的な共有だからこそ可能な面と危険な面とが隣り合わせである。しかし実際にやってみるとその成果は学生からのフィードバックによれば十分であったと思われる。

以下、その演習で得られた視点について紹介し、それらについて夢への問いかけ、夢へのアプローチ、夢との対話による気づきという観点から考察を加えてい

くという方法をとる。その際には実際に演習で扱われた筆者の夢を例に取り上げてそれら視点について考察を加えたい。

3. フィードバックで得られた視点と考察

問いが向かう対象はいろいろあるが、夢の内容に伴う実際の現実的な問いから夢見手に新たな気づきが生じることが多いので、フィードバックでは、夢見手があらためて何かに気づき発見することがどのように生じるのかについての考察も多かった。以下にはフィードバックで得られた視点として、(1) 語り直しや他者からの問いで気がつく、(2) 夢の独自性に違和感を感じていない、(3) 現実と対応しない次元がある、(4) 夢へのアプローチはマッサージを受けるような体感がある、という4点を挙げる。

語り直しや他者からの問いで気がつく

例えば、夢見手が新たに気がつく契機として、夢見手があらためて夢を聞き手に伝える行為そのものが夢の状況を再体験することとなっていたり、曖昧だった夢のイメージが想起され直してより明確になったりしたことが共通して挙げられた。さらに、他者から夢について詳しく尋ねられることで、夢見手が自分では気がつかなかった点について気がつくことも挙げられた。例えば次のような夢である（以下夢の例は筆者の夢で、上記演習で学生と共にアプローチした体験をもとに気づいた点から紹介する）。

【夢の例1】2022年4月26日の夢

ホテルの一室にいる。朝起きて、これから出かける。誰からか早くチェックアウトするよう急かされている感じがする。

よく見ると部屋は結構広くていろいろなものがある。ベッドの上にも着替えとか持ち物などが散らばっている。

部屋を出るのにいろいろと片付けている。空気清浄機とかズボン・プレスサーとかヘア・ドライヤーとか、コードをたたんで束ねて仕舞う感じのことをあれもこれもと繰り返す感じで、少しずつやっていく。

洗面もして、着替えもする。最後にトイレに入って用を足して、トイレもタオルとか消臭剤とかトイレット・ペーパーとかを簡単に整えて、これから部屋を出る。（というところまでが夢として想起した内容）

夢を想起して記録した時点では曖昧であったことが、読み上げていく過程で既に、夢でのイメージ体験がより明確になったりより詳しく思い出されたりした。具体的には、上記の夢で、誰かから急かされている感じが夢の体験では何処かからアナウンスのように声として聞こえていたことや現実にホテルの部屋で空気清浄機やズボン・プレスサーを使っていたことに対応したイメージであったことなどをよりクリアに想起した点である。さらに聴き手に問われて気づいたのは、ヘア・ドライヤーを使うことが現実にはないのにイメージは色や大きさ、コードの感触まで明確であることのギャップであった。また、通常の現実ではトイレで用を済ませてから着替えをするのにその順番が転倒していることにも気付かされた。ヘア・ドライヤーを現実では使ったことがないのに夢ではヘア・ドライヤーを片付ける体験がリアルに生じるのは、特に片付けることを夢見手に導いていると感じられた。また、現実とは違って着替えを済ませてからトイレで用を済ませるシーンもトイレで用をすることよりも綺麗に片付ける体験を夢が強調していると感じた。つまり、夢には夢見手が体験すべき思考があって、現実とは違った夢ならではの体験をさせることでその思考に夢見手を導くことがあると思われる。

それらの問いかけから最終的に大きな気づきが生まれる問いが聴き手からなされた。それは最近ホテルを利用しているのかという問いであった。ほとんど利用していないこと、夢で見たイメージは、仕事の出張で良くホテルを利用していた時代のイメージであったことである。そこからさらに実際に片付けるのかという問いに発展して、現実にはある程度片付けや整理を行うが、この夢で体験するほどの片付けや整理は行わないことも気付かされた。そうすると、最終的には、なぜ今、現実とは違った片付けや整理をこの夢で体験したのか、その意味を考えることで、人生の今という節目において、片付けや整理をすることの意味や「チェックアウト」から夢見手が暗示されたこと（夢見手の思考）に気がついた。つまり、現実と違った夢ならではの事というのは、個々の体験だけではなくて夢の状況全体や中心的な行為についてでもそうであって、最終的には今ここでなぜこの夢を見る必要があったのかを考える契機となる。ユングの方法でいえば、目的論的な問いである。

このようにまず、前提として夢を正確に捉える必要がある。夢で体験されている状況が正確に理解される必要がある。そのためには、夢のシーンに入っていくと詳しく状況を見て夢見手を通して夢に些細なことや

コントラストを尋ねていくと分かることが多い。フロイト(2007/1900/1930)は夢が願望充足(欲求成就)であるとして幾つかの見方を提案した。自由連想法を夢にも適応する・夢の全体ではなくて部分に焦点を当てて自由連想をする・夢の内容に現れる抵抗と夢の想起に生じる抵抗・顕在夢(昨日の経験)と潜在思想(潜在思考:幼児期の経験)を区別する・圧縮(縮合)と象徴解釈・夢の作業としての移動(遷移)などである。フロイトの方法は神経症治療の背景があって自由連想法であるため、初めは夢の個々の要素を細かく検討するが、そこからの自由連想で着想されたさらなる要素に関しては自由連想をする本人しかその根拠を確かめられないため、フロイトの議論で提出された自由連想の内容についてはそのまま受け取るしか術はなく、その根拠や議論の正当性を検討することが難しくなっている。さらに自由連想が展開すると夢の要素からかなり離れてしまい、夢の状況を正確に捉える作業からも遠ざかってしまうと思われる。

しかしながら、ここで行われている夢を正確に捉えるという方法は、ユングの方法により近いと考えられる。つまりコンテクストを詳細に語ってもらうというユングの方法にかなり近い状況がここでは実現されていると思われる。ユング(2016/1947)は、フロイトの因果論の見方が一つのことへ還元していく方法であるのに対比して、目的論的な見方は夢のコンテクストの差異を捉えることができる方法であって、それによって夢は個々の意識状況を補償する無意識の自発的で象徴的な表現であることを強調した。また、たとえばユング(2016/1947)は、夢の登場人物は夢見手の投影であることを強調して主体水準での解釈を取り上げるが、その際に客体水準で解釈できる可能性を検討した上で、主体水準で取り上げることを薦めている。その意味で夢に登場する固有名詞についての連想を踏まえた上で、登場人物は夢見手の人格のある側面の投影として解釈するという戦略も経験者から学ぶところである。

それとは別に、構造的に夢を捉えていく視点が経験などから蓄積されてきている。例えば、粉川(2016)や田附(2021)は夢の構造分析に用いる視点として、「夢の中の私と他(者)の関係性」・「夢の中の私の行為主体感」・「夢の状況」における他者の状態と私の視点などを挙げている。経験のある分析家が経験則から夢への焦点の当て方をしていてそれが有効であることが多いのは確かであって、例えば、動きからイメージへ変化であるとか、視点の移動とか、内と外の対比や水平と垂直という構造上の対比や思考の反映、違和感や異

質感の反映といった視点が挙げられる。つまり、コンテンツ・内容かフォルム・形式・構造か、という視点の対比という構造がここにはある。

ところが、夢を正確に理解していくと、夢と現実とは明らかに違うので、現実との対応から説明を考えるには必ず限界がある。そこで最終的になぜこの夢を見たのか?この夢を見たことによる意味や効果は何か?なぜこのイメージなのか?夢見手は何を体験してどう考えたのか?を問いたくなる。そうするとさらになぜ今この夢を見るのか?なぜ今このイメージを体験する必要があるのか?という問いになる。つまり夢見手にとっての夢の意味や意義ということになる。コンテクストや構造を吟味するとコンテンツや意味に迫ることになるということがここでも指摘できそうである。ユングの概念であれば主体水準への問い、夢見手が何を夢に投影しているのかという問いになってくるのだと思われる。そうすると、夢見手のあり方や考え方がそのまま夢に現れていて、夢見手が夢を体験するあり方によって夢を捉える次元が異なってくる。その点では、夢へのアプローチを経験した受講生からのフィードバックでは以下の二つの特徴が指摘された。

夢独自の奇妙さに違和感を感じていない:

思考への没入

夢へのアプローチを経験した受講生からのフィードバックで指摘された特徴の一つには、夢には現実とはちがった夢ならではのイメージ、夢の独自性、夢のユニークさがあるが、夢見手は夢で体験している状況のそういった奇妙さに気がついていないことが多い、ということである。夢見手には前提になっていて疑問を持たない状況にすることが多い。夢見手は状況に入り込んでいて他者からの問いで初めてその状況の奇妙さに気がつくという現象がある。先に挙げた夢の例1でも他者から問われて初めて夢見手が気がつく奇妙さはいくつかあった(ヘア・ドライヤーやトイレのこと、片付けや整理そのもの、ホテル利用そのものなどである)。それはなぜか?どのようにして生じる現象なのか?それは後の考察で議論することになるが、夢の状況やイメージは夢見手がその思考に没入した体験だからであると考えられる。

例えば次のような夢である。

【夢の例2】2022年6月3日の夢

たくさん子どもたちが家族や教師たちと一緒にいる。学校のような建物で、1階と2階では父兄参観のような情景が繰り返されている。

私は2階の教室の外にあるベランダにいる。そこには校庭から上がってくることができる階段もついている。我が子がかつて通っていた小学校で父兄として参加していて、地元の近所の知り合いと出会っては久しぶりと挨拶をしている。そのなかで私は最近その学校で起きた変化を思い起こしてみんなに話そうとしている。それはある女の子が教師や同級生に対して主体性を発揮して自分の考えを主張して、それが契機となって学校全体がより民主的になったことである。

下の1階や校庭では子どもたちや教師、家族が、整列したり、サッカーやテニスといったスポーツ競技の練習をしたりしていて、大賑わいだけど、そのシーンの一部にはまだ非民主的な強制や決めつけが残っていて、その女の子はそのことで調整に駆け回っているのが見える。

私は2階のベランダで集まった父兄たちに最近の変化を伝えていて、その女の子が校庭から階段を駆け上がって来て、私に向き合う。目がクリクリとパッチリしていて色黒の健康そうな表情で、「何してんの?」と言わんばかりの勢いなので、私は娘の名前を言って「その父親である」と自己紹介をすると、女の子は「分かっている」と言わんばかりにうなづいている。私が「ここでみんなにあなたの活躍を伝えている」事を言うと、その女の子は校庭に戻っていった。

上記の夢の例2では、夢に登場する「私」は現在の年恰好であり、「私」の子供たちは既に皆成人をして働くような年齢である。夢の中でも「私」の意識はそのままであるにも拘らず、夢の中ではそのまま父兄参観に参加している。この奇妙さに夢を体験しながら気がついていない点は、夢の状況に没入して体験しているがゆえに気がつかない奇妙さなので、夢で体験する必要があった奇妙さではないかと考えた。夢見手は、そもそも父兄参観にいること自体の奇妙さに気がついておらず、女の子が夢見手の娘のことを分かっているという奇妙さにも気づいておらず、さらにベランダにいることの奇妙さにも気がついていなかった。他者に「夢の状況で娘はその学校に通っているのか」と質問をされて、あらためて気がついた点であるし、なぜベランダにいるのかと問われて初めてその奇妙さに気がついていて、そのことから夢見手である筆者が学生との議論で次第に気がついたことは、夢の中のいろいろな次元で、「私」の位置が常に中間であって、「私」は常に、間についてつなぐ役、媒介の機能を果たすという

ことである。この夢の中の奇妙さは「私」の中間性であって、それは（民主的であることや主体的であることを志向することも含めて）夢見手である筆者の思考の顕れ、反映であると思った。

そして、この中間であることが夢の中で体験されるがために、その奇妙さに気がつかないという点が特徴であると思われる。これがこの夢の構造的な特徴であり過程上の様態である。

現実と対応しない次元

次に二つ目の特徴は、夢には現実と対応しない次元があるということが挙げられると思われる。夢について質問を聞いていくと夢に現れている事象と現実との対応が問われることが中心となっていく。フロイトも顕在夢には昨日までに現実で経験したことが多いと指摘しているばかりか、潜在夢（潜在思考）も幼児期の記憶や体験が多いとしていて、結局は現実の体験によることが中心である。それに関連してフロイトも指摘する類型夢ということがある。多くの人が夢について同じような経験をするということがある。多くの人が同じような夢を見るということもあるし、一人の人が繰り返し同じような夢を見るということもある。繰り返しうなされる夢もある。多くの人に共通するようなテーマ、例えば夜驚症のような怖さを体験するための夢であるとか、向き合うべき対象に追いかけられる夢など、夢には心のあり方にとって必要な布置を実現してくる次元がある。その意味では、夢に防衛や抵抗の機能を位置付けることも可能だと思われる。

また、多くの場合夢はそのまま放置するとほとんど忘れ去られることも共通している。フロイトはなぜ夢を忘れるのかについて幾つかの考え方を紹介している。そもそも刺激として微弱であるため忘れやすいし、普段からあまり関心を持っていないために忘れやすい。夢を扱わなければほとんどの夢はそのまま忘れ去られているし夢を見たことすら思い出せなくなる。逆に夢に関心を持つと夢を覚えていることが多い。ところが、こうした現実的な次元で夢を考えるのとは違って、現実とは対応しない次元の夢があると思われる。例えば次のような夢の場合である。

【夢の例3】 繰り返し見る夢で普段は忘れていた夢電車に乗っている。いつものループ線のような線路の配線と駅の配置である。目的地の方向に向かう電車に乗るための乗り換え駅（A駅）で乗り過ぎてしまい、一つ先の駅（B駅）まで行ってしまふ。A駅で別ルートで電車に乗り換えて目的地

に行くには、B駅からA駅まで線路沿いの道を歩いて一駅分戻らなければならない。狭い線路脇の隘路を歩いて行くと道は次第に高く上っていった。しかも堀沿いの道になっていて、気がつくときかなり高い。遙か下に堀が見えている高架上の道を自分は歩いている。バランスを崩して落下すると泥の中に横向きの態勢で落ちた。泥まみれになってとても臭い。その汚れた状態でそのまま歩き始めて駅を目指す。

この夢は普段は忘れていたが、ときどき思い出したかのように繰り返し見ている夢であり、長い間見られている夢である。その意味で、現実との対応があまり考えることができない夢である。実際夢に出てくる駅や線路のパターンは思いつく現実との対応は無いし、橋や道路のことも、下に落ちる泥のことも現実との対応は考えられなかった。何しろ、長い間繰り返されているパターンなので、その時その時の現実との対応では考えにくい夢であろうと思われる。

この夢を取り上げて受けた質問の中に、なぜB駅に行くのか？という問いがあった。繰り返し見るからにはB駅では何かあるのではないかというのである。そこからそもそもB駅はどんな駅なのかというコンテキストへの問いがなされた。そこで思い起こされたのはいつもB駅では降りることなくB駅のことをよく知らないということであった。そこでB駅の記憶を辿ると、B駅から見た風景として、現実では無いがアニメや漫画やイメージに出てくる古い街や異界の入り口をB駅の中から外に垣間見ていたこととその風景が思い起されてきた。そこでいつも筆者が異界への興味関心や憧れを抱いていた事とその関心はいつも入口ばかりで中に入り込めないことがこの夢と結びついた。つまり、自らの関心で寄り道するかの如く道をそれて入口を垣間見ることは繰り返されるが、常に元の軌道に戻ろうとする異界と筆者の在り方に気がついた。元の軌道に戻るには危険な隘路を潜り、なおかつ叩き落とされて泥まみれになるが、その試練の跡もそのままに元の軌道に戻ろうとすることが、筆者のあり方をとりわけ体験させてくると得心する気づきであった。特に叩きつけられる衝撃と泥臭さという身体経験が伴うリアリティに対して得心できる気づきであった。

そして、それらの見方にどれほどの根拠があるのか、必然性があるのか、それは恣意的ではないのかという問いに対する答えは、こうした夢見手の受け取り方によって判明するといえるだろう。この夢でA駅で乗り過ごすという出来事が生じるのは、夢見手に想起

されたインパクトで言えば、その先にあるB駅戻りたさゆえだということに気がついた。そしてB駅からA駅に戻る際に出来してくる過酷さは、ものすごく狭くなることと高くなることであり、その高みから泥の底に叩きつけられて泥まみれ匂いまみれになることであり、それは夢見手の筆者が徹底的に境界性を肌身に体験することであった。そして、こうした身体経験が実は、夢へのアプローチを経験した受講生からのフィードバックの中で最も興味深い現象であり、夢へのアプローチを受けた経験からの印象や感想で、スッキリしたとか、解消したとか、知恵の輪が解けた感じとか、全身マッサージを受けたような感じ、という経験をしていることなのである。

夢へのアプローチにはマッサージを受けた体感がある

これまでの夢の例で挙げてきたように、夢見手に生じる決定的な気づきには軽く衝撃が伴っていて、それは身体感覚や皮膚感覚として、ほぐされた感じが伴うことが多いと思われる。そうしたことがフィードバックに記載されたのだと思われる。このことは、夢の内容でもなく夢の構造でもなく、夢とそこからの気づきのプロセスに伴う体験のモードである。しかしながらこのことがあって初めて「気づき」のインパクトがあるのであって、夢に対する夢見手の主観的な気づきや納得を成立させる重要なファクターであると思われる。しかも、筆者の経験から言えるのは、この気づきを得た時の体験の雰囲気や気分、それに伴う様相には、夢の中の雰囲気や気分、様相が微妙に混じり合って関連して繋がっていると感じられるのである。つまり、夢の中での思考体験からの連続性があるって気づきに得心性をもたらしている可能性があるのではないと思われる。このような夢からインパクトを受けて気がつくという経験には、これまで検討してきたように、他者からのインパクトということがあって、しかも現実との違いによって自分の在り方に気がつくということが伴ってくる。投影の引き戻しと言ってもよいかもしれない。自分が見たいように見ていたのが、他者と現実の二つから違うよと言われて気がつくような感じである。見たいように見ていたということを知るためにコンテキストに詳細に馴染むことが必要で、そのことが自らの姿勢に気がつくことでもあるし、投影していた自らのコンテンツに気がつくことになるのかと思われる。

4. おわりに

ここまで夢についての気づきの特徴について、

フィードバックされたことを主に四つの観点で紹介して、夢への問いのあり方を検討してきた。一つは他者からの問いかけで自らの思考に気がつくということ。また、気づかれていない夢の独自性と問うことで、夢の中に入り込み没頭している自らの思考に気がつくということ。さらに夢で現実とは対応しない次元を問うことで自分の基本的なあり方に気がつくということ、最後に、夢について体験というモードで問うならば、夢とその気づきの体験で共通したモードが得心性に伴うのではないかとということであったと思われる。ここで紹介したグループでの夢へのアプローチとは、これまでの議論を踏まえるならば、夢について問うということで、他者と思考を対峙することを経て、夢で体験させられた思考のあり方に気づくということであったかと思われる。その際にほどけるという体感が気づきに伴っていることが多いと考えられた。

参考文献

- 吾妻 壮 (2018) 精神分析的アプローチの理解と実践. 岩崎学術出版社.
- フロイト, S. (2007/1900/1930 新宮一成訳) 夢解釈 I / II. フロイト全集4/5. 岩波書店. (Freud, S. (1900/1930) *Traumdeutung*. Achte auflage. Verlag Franz Deuticke, Reipzig-Wien.)
- フロイト, S. (2011/1940 道籐泰三訳) 続・精神分析入門講義 第29講 夢理論の修正. フロイト全集21. pp.6-31. 岩波書店 (Freud, S. (1940) *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Imago Publishing Co., Ltd. London.)
- ギーゲリッヒ, W.・河合俊雄共著 (河合俊雄・田中康裕共編) (2013) ギーゲリッヒ 夢セミナー. 創元社.
- Giegerich, W. (2021) *Working with Dreams : Initiation into the Soul's Speaking About Itself*. Routledge.
- ユング, C.G. (2016/1948 大塚紳一郎訳) 夢心理学概論. 横山博監訳『ユング 夢分析論』. みすず書房. pp.35-93. (Jung, C.G. (1916/1928/1948) *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes. Über psychische Energetik und Wesen der Traume.*)
- ユング, C.G. (2016/1931 大塚紳一郎訳) 夢分析の臨床使用の可能性. 横山博監訳『ユング 夢分析論』. みすず書房. pp.3-33. (Jung, C.G. (1931/1947) *Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse. Wirklichkeit der Seele*, 3. Aufl. 1947, p.68ff.)
- 河合隼雄 (1967) ユング心理学入門. 培風館
- 川原稔久 (2019) Giegerich, W. の思考における論理と身体. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要第12号: 3-7.
- 川原稔久 (2020) 心理学におけるロゴスとレンマ: ギーゲリッヒ, 山内得立, 中沢新一. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要第13号: 3-6.
- 川原稔久 (2022) 夢の分析. 大阪公立大学オープンキャンパス・シンポジウム資料 (2022年8月7日).
- Konakawa, H. (2016) Attempt at comparison of Japanese and Western dreams using structural dream analysis. *Archives of Sandplay Therapy*, 29(1): 83-100. (粉川尚枝 (2016) 夢の構造分析を用いた日本人の夢と西洋人の夢の比較の試み. *箱庭療法学研究*, 29(1): 101-115)
- 粉川尚枝・松岡利規・田中康裕・河合俊雄・畑中千徳・梅村高太郎 (2018) 夢見手の自己感の様相と夢の構造の関連. *箱庭療法学研究*, 31(2): 3-17.
- 粉川尚枝 (2020) 現代の老年期の人々の自己感と夢の構造の検討. *箱庭療法学研究*, 33(1): 3-12.
- 大塚紳一郎 (2022) 心理学は越境する: ユング心理学の領域横断性. 所収: 岩壁茂編集『はじめてみよう臨床心理学研究』. *臨床心理学*, 129:22(23): 289-292. 金剛出版.
- Tazuke, K. (2021) Dream Structure Characteristics of Modern Japanese People: A Focus on Differences with Age. *Archives of Sandplay Therapy*, 34(2):41-50. (田附紘平 (2021) 現代の日本人における夢の構造の特徴: 年齢による差異を中心とした検討. *箱庭療法学研究*, 34(2): 51-60).

(2023年1月17日受稿, 2023年2月9日受理)